

衛
星



「俳優の三浦友和が、RCサクセションのメンバーだった。って言ってもさ、最近の子たちは信じないんだよ。本当の事なのに。いやマジだって何回言ってもギャグにとられてさあ、埒があかないわけ……それでおれ、思ったんだよ。事実……真実って、当事者の感覚でしかないんだなって。究極、本当の事と嘘の事、なんて区別も意味ないんじゃないかってさ。それはもう感覚の違いだからさ。本当だって信じる奴にのみ、それは本当なわけ」

喋りながらシューズは背広を脱ぎ、椅子に腰を下ろした。

食卓には丼がひとつ、ちょこんと置かれている。少なめに盛られた白飯の上には、刻み海苔、鰹節、わさび漬をのせる。それから丼の縁に急須をあて、熱い緑茶を注ぐ。具材の上からではなく、白飯にしみ込ませるように注ぐのが、シューズの家で昔からよく食べられてたお茶漬けだった。

「お、サンキュー」

早速箸をつけようとするシューズに、するどい視線が突き刺さった。

ナユは彼の対面に座り、膝の上でエプロンを畳んでいた。

卓上の塩と醤油の瓶の位置を揃え、新聞と雑誌はラックに戻す。テレビのリモコンのボタンの隙間を布巾で拭く――いずれの動作も、視線はシューズに固定されたままで行われた。

「……え、キレてる？」

「え、キレてないと思ってる？」

ナユは間髪入れないどころか、彼の言葉を追い越しそうな勢いで答えた。

「や、思っていないけど……」

「じゃあ何で聞いたの」

「何でって……すぐ一睨んでるから」

「いいから食べれば」

ナユは無然として言い放ち、折り畳んだ布巾を広げて、また折り畳んだ。

シューズは少し考えて、箸を一旦箸置きに戻した。そして持っている中で最もしょぼくれた、雨に濡れそぼった老犬の顔をこしらえる。

「……悪かったって」

前回は、文字入力の予測変換だった。

メールや着信履歴は周到に消去していたのだが、まったく予期せぬところからぼろが出た。携帯を奪ったナユがためしに入力した「あ」。決定的なフレーズは別にあったが、ナユには「あ」の予測変換が何よりも耐えられなかった。「会える」「会えたら」「会いに」。

自分に送られてくるメールの文面には、一度も登場したことのないフレーズであった。「き」今日「お」遅くなる「さ」先に「ね」寝てて。「きおさね」で片付く、それがナユ宛のメールの文章であって、売れ線のJ—POPの歌詞じゃないが、恋人と会える、会えないといった感傷とは無縁の単語の連なりだった。

今回は、クラウドである。元々機械音痴のシューズは、ナユと共同で使っているパソコンに、自

分の携帯の電話帳、メール、メモが自動的に同期されている事を知らなかった。

「ほんと、シュージって迂闊だよな」

不気味なほど明るく発せられたナユの言葉に、シュージはここぞとばかりに調子を合わせた。

「……っていうかよ、余計な機能だよな。何勝手に同期してくれてんだっていう」

「機械苦手なの、昔からだよな。携帯のアカウント設定するのに一週間かかったことあったじゃない」

「もうおれ、電話の機能だけでいいわ。携帯。携帯……っていうか、全部見た？」

「見たよ」

「……あ、そう」

「あれ、やめた方がいいよ。相手別に進捗状況まで書いておくの。デート何回目とか、その時おごったゴハン代がいくらとか」

目的の完遂までにいくらかかり、どれだけの時間を要したか。経費と納期。ナユの見たところ、それはまるで業務上のやり取りのように律儀に進められていた。そして彼女はまた、かつて自分もそのカテゴリーのひとつである「現在進行中の案件」の中に収まっていた一人だったのだと知った。

「テクノロジーが、シュージの敵だね」

「だよなあ！ほんと。ドラえもんとか売り出されたらヤバイよ。おれ身動きとれなくなるわ」
シュージは大袈裟に笑って机を叩いた。

追い込まれた状況を一変させる力技、のつもりだったが、ナユは表情を変えない。誘い笑いの余韻が寒々しく響き、停滞の時間が継続する。

「うける」

ナユは磨き抜かれた大理石の床に、泥つきの岩石を放り投げるように呟いた。

「……うけるよなあ」

「マジでうけるね」

「っていうかさ、マジでゴメン」

「食べれば、それ」

「あ、うん。……っていうかさ」

「冷えてんじゃない、もう」

「あ、うん……うん」

言われるままに箸をとる。海苔も鰹節も飯も、色が違うだけでもはやお茶と一緒にくたになっている。冷えきってはいないが、何もかも人肌にぬるい。

シュージは四面楚歌で苦しんでいる様を装っていたが、実際は自分のとるべき方策を既に心得ていた。

ただひたすら待てば良いのだ。

浮気がばれた時点から、「ナユになじられ、しぼられた挙げ句、許される」それさえ既に彼の予定に組みこまれていた。別れるという選択肢が有り得ないことは、彼女の性格、収入、家柄と、自分の性質、経済力、家柄とを総合的にとらえることで至って簡単に導きだされる結論だった。

「……っていうかさ、私のことだけ、見てるわけにはいかないのかな」

思ったより早く事が済みそうだと、シュージは内心ほくそ笑んだ。

「生まれ変わるよ、おれ。君の事だけ見てる。これからはずっと」

シュージは蕩けた声色でナユの手を両手でつかむ。歯の浮くような台詞も、目的完遂のためにそれを言う、という項目にチェックを入れると思えば平気で口に出来た。

まずは肩に触れ、髪をなでる。張りのある腰に手を添え、椅子から立たせる。一連の流れが容易に頭に浮かんだ。

「……ありがとう」

ナユが呟いた瞬間、ふっと闇がおとずれた。

「ん、停電……？」

シュージはあくまで冷静だった。が、少し妙だとも思った。

照明が落ちたのであれば、やがて目が慣れてくるはずだった。家具や壁の色がおぼろげながらも見え、カーテンの隙間から街灯りが差し込んできてもいいはずなのに、依然として視界は黒一色に満ちている。それは室内の闇ではなく、森林に毎夜訪れる揺るぎない闇だった。

「……何だあ？」

シュージは気配を感じた。

耳、鼻先、肩のすぐそばに、体温と密かな呼吸があった。一人ではない。突然、室内の酸素が満員電車なみに薄くなった気がする。

彼は闇の中に白い粒を見つけた。

粒は蛍のように光の軌道を残しながら中空をくねくねとのぼり、静止し、ふくらんだ。そのふくらみは笑うように震えながら、広がって、破裂した。と気づけば、元の居間の景色に戻っていた。

ナユは依然として座ったままだった。

異変といえばただひとつ、お茶漬けの椀が卓上でひっくり返っていたことぐらいだった。

「……大丈夫か？」

椅子から立ち上がり、ナユに手を伸ばす。

が、その手は肩に届かなかった。不可解に思ってさらに手を伸ばすも、ストライプシャツの布地に覆われたなだらかな丘は、まばたきをひとつする間に、頭一個分遠ざかった。

ナユは座ったままだった。

シュージはすぐに離れていっているのは彼女ではなく、自分なのだと気づいた。

引っ張られている実感はない。じりじりと背後へと体が移動する。その動きは底面の水滴によって意志をもったかのように滑るお椀に似ていた。

また、その移動はある一点で止まった。

次に待っていたのは、横移動だった。

今度のそれは、遊園地の乗り物が稼働する時の慎重さで始まる。それが実際には横へのスライドではなく、いわばメリーゴーランドの回転だと気づくのにさほど時間はかからなかった。ナユと一定の間隔を保ちながら、シュージは回っていた。

前後と違って、胴体を引っ張る力を明確に感じた。人は体を横に動かされると、強制されている、という意識を持つものらしい。

「……キレてる？」

「え、キレてないと思ってる？」

「や、思っていないけど……」

「じゃあ何で聞いたの」

最初のやり取りを二人はやり直していた。

「何でって……」

ナユはおもむろに立ち上がって、シャツを脱ぐ。

胸から腹部にかけて、肌色が消えていた。その代わりに、幾重にも折り重なった濃厚な紫が広がっている。それは、白梅酢にほどよく漬かった赤紫蘇の葉だ。

「もみじそ」の鎖帷子から染み出るピンクの汁が、へそに向かって垂れている。

ナユはその一枚一枚を破けないように丁寧にはがしては、義務みたいに口に運んだ。

噛むと奥歯でかすかにみり、みりと音がした。

「嫌だったのは、メモを見つけたとき。しばらくパソコンの前でぼーとしちゃって、私……そのうちスクリーンセーバーの真っ黒い画面になったの。どんな顔してるかって思って、見てみたら、全然普通なんだ。ほんと強がりじゃなくて、スーパーで野菜の値段見てるときっていうか、鏡の前で化粧するときっていうか……まあ、素っていうか。だから、これって君への罰とか、そういうんじゃないんだ。むしろ、全然平気になっちゃった自分が……嫌んなってね、私」

ナユの告白は回転の原理を説明してはいなかった。停電、赤紫蘇、お茶漬。それらが科学的に回転を生み出す要素になり得るはずもない。

ただ、この現象の起点はシュージへの怒りでなく、一周して彼女の自省にあった。それゆえ、「ごめん」「許してくれ」と哀願して回るシュージの謝罪にはまるで意味がなかった。

回転は律儀で、軌道上には何度も家具が立ちふさがり、その都度シュージはそれぞれの硬さを味わった。わかりきっていた事だが、だいぶ硬い。ソファ、オットマンで気を緩めた先の茶箆で悶絶し、糸の涎を垂らした。風にはやがて吐瀉物と白い泡が混じる。二人の写真、白糸の滝で撮ったスナップにもぬたっと貼り付き、垂れ下がる。

喉は胃酸で焼けただれていた。吐き気はたえずこみ上げてくるが、からっぽの胃からはもう何も出てこない。

シュージは朦朧とした意識の中で、ナユの言葉を思い返していた。

「……っていうかさ、私のことだけ、見てるわけにはいかないのかな」

回転を止める方法はわからない。

ただし、吐き気を止める手段はひとつだけある。動かぬ任意の一点をひたすら注視するのだ。ドキュメンタリー等の画面ぶれの多い映画を見ているとき、少しスクリーンから目をそらして前の席でも見つめていれば吐き気は次第に収まってくる。特に画面酔いしやすい質だったシュージは日頃からそのことを心得ていた。

見るべきものは、核である。

月でいうところの地球。動かぬ一点は軌道の中心と決まっていた。

シュージはナユに手を伸ばした。

ナユもまた、呼応するように腕を前に持ち上げた。二人の指先はぎりぎりのところで触れ合わない。あえて大袈裟に言えば、それはミケランジェロの描いた「アダムの創造」に似ていた。惑星と衛星の間には繋がりがある。が、同時に決して解消されない距離もある——悟ったシュージは、そのまま、ナユを見つめ続けた。

「こないだ私、韓国のドラマ見てて。昼間……ほら、バイト休みだったとき」

「うん。水曜？」

「そうそう。で、そのドラマ、よくある難病もののラブストーリーなんだけど」

「うん」

「男が女に告白するところで、字幕が出てて。〈これから二人で純愛しよう〉って」

「何、それ」

「ほんと、ほんと」

「それで女は？」

「〈うれしい〉だって」

「え、それ返事になってる？ 翻訳、間違えてんじゃねーの？」

「でもさ、私、それが妙にこたえてさ。いいじゃん、純愛。手、つないでさ。病室から抜け出すんだ」

「……ダサくね？」

「うん。ダサイダサイ」

「っていうかさ、病室抜け出したら駄目じゃね？ 治療しないと」

「だよな……。でも……なんか、泣けてくるよ」

「そうか……？」

「どうしてもって事が、あるんだよ。その二人には」

「そうか……」

「そうそう……………」

「そうか……………」

話しているうちに、歳月が過ぎた。

よく晴れた日曜日の朝、ナユは道を歩いている。

家から駅までの直線コース。歩道橋の色、木の葉の色、新しくなった信号機と、見慣れた景色のなかのちょっとした違いを見つけながら歩く。もっとも、いちばんの違いはおろしたてのブーツだった。

下北沢、吉祥寺、高円寺、恵比寿。どこへ行こうか迷う。

たまに、平泳ぎするように手を前から横に、動かしてみる。すいつ、すいーっと空気を平たくのばすように。

手応えはない。

けれど、指の数センチ先に気配を感じる。触れられない「そこ」にある空気が、ナユは愛しくてならない。

君も衛星、持ってるんでしょ？

あつ、はい。

だと思った。わかるんだ、私。

どこからか、そんな会話が聞こえてくる。およそ多くの人々が一人で歩いているように見えて、そうではなかった。

彼らは路地裏やちょっとした物陰にかけこんで、お互いに服の前をまくる。へそを見せ合うのだ。そこには決まって、ピンクの汁がたまっていた。

そしてすぐに別れた。彼らはつねに一人でないから、無理して繋がろうともしなかった。

街は午後のおかるさと、紫蘇の匂いで満たされていた。